

科目名	メディア文化論特講	担当者	コガフ 古賀 太	期間	通年	単位数	4
-----	-----------	-----	-------------	----	----	-----	---

【科目概要】

目的	<p>映画は娯楽であると同時に芸術であるが、さらに多様な読解が可能なメディアであることを理解することが一番の目的である。</p> <p>映画は作られた国ばかりではなく、海外で上映されることも多い。その場合に国内での評価とは異なる場合が多いが、具体的な作品を使ってその諸相を読み解く。</p> <p>また映画はその時代背景に密接に関連する。映画製作と時代背景との関係を探る著作をもとに、自分なりに映画と社会の関係を考える。</p>		
到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 映画のさまざまな読解を比較検討する。 2. 自分なりの新しい読み方を考える。 3. 映画製作の時代背景との複雑な関係をさぐる。 4. 映画が社会的な産物であることを認識する。 		
学修方法	<p>前期：映画『羅生門』を見て、基本教材や参考図書を読みながら整理し、自分なりの読解を考える</p> <p>後期：基本教材や参考図書を読みつつ、一人の監督の占領期の映画を可能な限り見て、その時代背景について自ら調べる。</p>		
スケジュール	<p>前期：レポート課題(1)(2)は、それぞれ最終稿を7月中旬、9月中旬までに提出すること。</p> <p>後期：レポート課題(1)(2)は、それぞれ最終稿を11月中旬、1月課題提出締切日までに提出すること。</p>		
成績評価	種別	割合	評価基準
	レポート	80%	映画を見て、文献を読み込みながら自分の考えを述べるができるかを基準とする
	平常評価	20%	提出期限及びやり取り全般を評価する
履修者への要望	<p>まず、対象の映画を複数回見ることで、違うものが見えてくることを知って欲しい。映画は歴史が浅いので、いわゆる「映画史」は完全にできあがったものではなく、いまだに書き換えられつつあることを認識すること。</p> <p>次に複数の文献を読んで、他者の見方について比較しながら考えること。さらに時代背景を示す文献を読みながら、映画と時代について考えて欲しい。できたら英語の文献も読むとよりいい。読んだ文献を引用しながらも、映画を見て自分が感じたことや自分なりの分析を大事にして、論文の中に生かすこと。</p> <p>書籍は購入することがより望ましいが、映画作品はレンタルで見てもかまわない。後期のレポート(2)については、夏休み頃から少しずつ準備すること。</p>		

【レポート課題】

基本教材 1	
教材の概要	<p>著者名： 北野圭介 教材名： 『日本映画はアメリカでどう見られてきたか』（平凡社，2005年） ISBN:978-4-58-285285-1 720円+税 AMAZON等の古本で入手可能</p> <p>日本映画がアメリカでどう見られてきたかの通史である。とりわけ、初めて世界各地で上映された日本映画『羅生門』については、当時の批評を含めた細かな解説がある。</p>
参考図書	<p>黒澤明著『蝦蟇の油 自伝のようなもの』（岩波書店，2001年） ISBN:978-4006020378 1,100円+税 岩本憲児編『日本映画の海外進出』（森話社，2015年12月刊） RICHIE Donald. <i>Focus on Rashomon</i> (amazon等の古書で安価に入手可能) 『世界映画大事典』（日本図書センター）『日本映画発達史』（中公文庫）『世界の映画作家 日本映画史』（キネマ旬報社）などは図書館で参照すること。</p>
履修上のポイント	<p>まず黒澤明監督の『羅生門』をDVD等で複数回見ること。それから教材を始めとするさまざまな文献（映画史や映画事典を含む）を読んで、評価の違いを明らかにすること。そしてなぜそのような読解の差が生じたのかを考えながら、自分なりの読解を示すこと。 できるだけ多くの文献に当たること。</p>
レポート課題 1	<p>『羅生門』を見て教材を読み、この映画の海外での評価についてあなたなりの考察をなさい。（2,000字以上） 留意点： 英語の参考図書も読めたらなおいい。</p>
レポート課題 2	<p>『羅生門』のこれまでの評価の歴史をたどり、自分なりの位置づけをなさい。（3,000字以上） 留意点： 参考図書の事典や映画史の本のほか、『キネマ旬報』などの雑誌や新聞の評価まで比較できたらなおいい。</p>

基本教材 2	
教材の概要	<p>著者名： 平野共余子 教材名： 『天皇と接吻』（草思社，1998年）ISBN:978-4-79-420776-0 2,900円+税</p> <p>第2次世界大戦後の米国による占領下（1945-1952）において、日本映画がどのような検閲を受けたか、映画人たちはどう対処したかを、米国の公文書を中心に綿密に調査して分析したものである。</p>
参考図書	<p>岩本憲児編『占領下の映画』（森話社，2009年）ISBN:978-4-91-608793-5 3,200円+税 北村洋著『敗戦とハリウッド』（名古屋大学出版会，2014年） ISBN:978-4-81-580775-7 4,800円+税 中村秀之著『敗者の身ぶり ポスト占領期の日本映画』（岩波書店，2014年） ISBN:978-4-00-024477-0 3,200円+税 土屋・吉見編『占領する眼・占領する声』（東京大学出版会，2012年） ISBN:978-4-13-026232-3 5,400円+税</p>
履修上のポイント	<p>占領下の日本において、映画がどのような制約のもとで作られたかを理解すると同時に、映画の作り手たちがどのようにして作家性を維持し、またさまざまなジャンルを定着させていったかを探る。</p>
レポート課題 1	<p>教材を読んで、そこで取り上げられている作品を1本見ただうえで、あなたが考えたことを述べなさい。（2,000字以上） 留意点： 映画作りに検閲が果たした役割と映画人の抵抗について考えること。</p>
レポート課題 2	<p>占領下に活躍した日本の監督を一人選び、その作品を可能な限り見て、教材や参考文献を参考にしつつ、時代と映画の関係について論じなさい。（4,000字以上） 留意点： 映画を見ながら、隠された意味を探ること</p>